

データの公開、リポジトリ・システムの構築に関して ※以下に紹介する URL は予告無く変更される場合があります。

言葉の意味：ハーベスタ=OAI-PMH で定められた要求を発するソフトウェア

(cf.: <http://www.dap.ndl.go.jp/home/modules/pukiwiki/index.php?OAI-PMH> OAI-PMH とは)

(cf.: http://www.nii.ac.jp/metadata/oai-pmh/oai-pmh_chiba.html OAI-PMH と図書館サービス)

リポジトリ=元来は資源・情報の貯蔵庫という意味だが、OAI-PMH 要求に従い結果を返す側

データプロバイダ=リポジトリを維持し、OAI-PMH によりメタデータを公開する側

サービスプロバイダ=データプロバイダのデータを OAI-PMH により集め、そのデータを提供する側

1. リポジトリ・システムについて

(1) パッケージソフト(100万円～)

リポジトリ構築のシステムとしてオープンシステムで DSpace(MIT で開発)と EPrints(サザンプトン大で開発)がありますが、無料で利用できるものの、維持・管理等を自前でしなくてはならず、かなりのスキルが必要です。そこで、市販のもので以下のパッケージソフトが存在しています。

アグレックス：http://www.sapporo.agrex.co.jp/modules/agx_ir/ 北大で利用

CMS：<http://www.cmssc.co.jp/modules/office/pdf/dspace.pdf> 三重大他で利用

京セラ丸善システムインテグレーション：<http://www.maruzen.co.jp/home/educb/sozai/DSpace.pdf> 九大など

長崎大学の事例：<http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/dspace/index.jsp> **デモ>長崎大平林氏**

(cf.: <http://www.nii.ac.jp/hrd/ja/portal/h18/txt5.ppt> 学術ポータル担当者研修資料 オープンソースのパッケージ化)

(2) 国産オープンソースの利用(無料)

ZOONIPS(ズーニプス)：理化学研究所脳化学総合研究センター開発、OAI-PMH に準拠、慶応大で導入

URL：<http://xoonips.brain.riken.jp/> 登録すれば、無料で利用できるよう。 **デモ>飯島**

(cf.: <http://www.nii.ac.jp/hrd/ja/portal/h18/txt5.ppt> 学術ポータル担当者研修資料 国内オープンソース)

2. データプロバイダとしての公開手段・方法

学内等で生産された研究成果物をデータプロバイダとして公開する側は、過去には印刷物によるものがほとんどでしたが、現在ではその公開手段は学内、もしくは図書館のホームページ等で行うことが進んでいます。公開している形態はそれぞれの機関でこととなりますが、検索まで可能なシステム公開(例1・2)もあれば、単なる執筆者、論文(タイトル)名等の書誌事項に本文データをリンクさせるやり方(例3)まで存在します。もちろん、その中には DSpace 等のソフトを導入している機関もあります。

例1：<http://library.niu.ac.jp/scripts/mgwms32.dll?MGWLPN=NIU&RTN=ENT^F05NIU570&DB=A>

例2：<http://210.137.222.247/mokuji/osearch.htm>

例3：<http://www.nagasaki-gaigo.ac.jp/library/ronso.html>

例4：[http://www.niu.ac.jp/~library/Test/IR/NIU_Kiyo\(xls\).htm](http://www.niu.ac.jp/~library/Test/IR/NIU_Kiyo(xls).htm)

例5：http://www.niu.ac.jp/~library/Test/IR/NIU_Kiyo.html

しかし、そもそも、リポジトリという概念から言うと「OAI-PMH の要求・リクエストに対してのやり取りができる」ことがデファクト・スタンダードとなっていますので、上記のように研究成果物の公開までは滞り着けたとしても、それを世界中から利用してもらうための方策を考えなければなりません。上記の URL が google/google scholar 等で検索にヒットすればまだしも、紀要等公開はその大学や図書館に来て初めて分かることも多く、ましてや、論文の本文自体を google/google scholar 等が拾ってくれるところまでは行きません。

そこで、上記のように公開されたデータを OAI-PMH によるメタデータとしてどのようにハーベスティングが可能かについてご紹介します。なお、本文データはスキャナ(3万円程度)で簡単に PDF 化することが可能です。

3. NII等サービスプロバイダによるハーベスティング

リポジトリ・システムを導入しなくても、自館で作成した(ローカル・システム)のデータを JuNii プラス(次期 IR 公開システム<http://ju.nii.ac.jp/oai/junii2.xsd>)仕様のメタデータに変換し、OAI-PMH で発信するツールをもてば、それを NII 側でハーベストしてもらうことで、より飛躍的に認知度・利用度が拡大するものと考えられます。この2段階方式は、コストパフォーマンスを迫及する観点からすると、非常に有意義なシステム構築であると言えます。本来的には研究成果物をいかなる形であれ公開し、より多くの人に利用してもらうことが最終目的で、公開・情報発信の形式にとらわれる必要もないのではないかと考えます。名古屋大学情報連携基盤センター学術電子情報掛の山本哲也氏の開発プログラムをご紹介します。

<http://info.nul.nagoya-u.ac.jp/pubwiki/index.php?tinyoai>

<http://info.nul.nagoya-u.ac.jp/pubwiki/index.php?AIRway%CF%A2%B7%C8%CE%E3>

xml とは <http://www.atmarkit.co.jp/fxml/rensai/rexml01/rexml01.html>